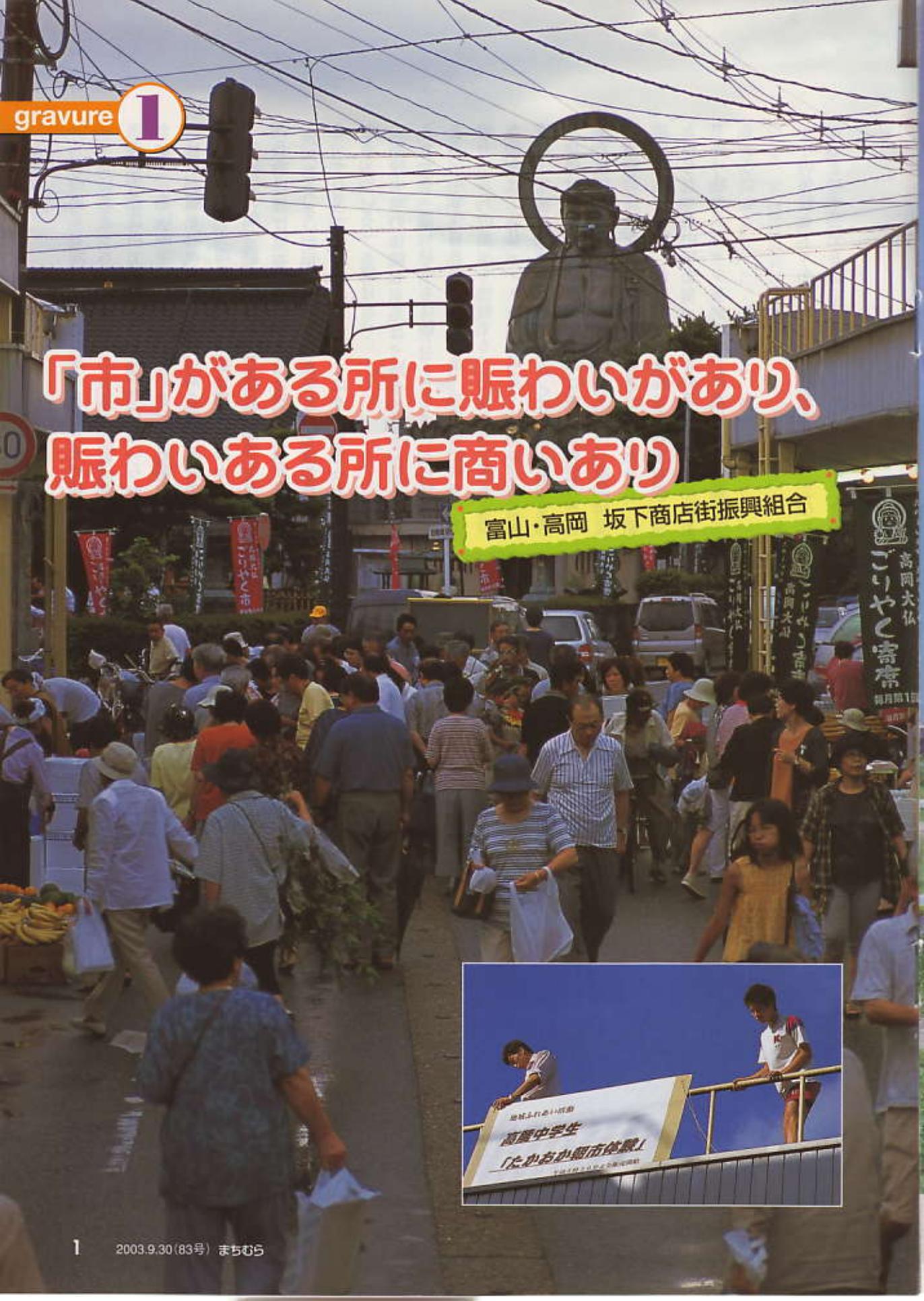


「市」がある所に賑わいがあり、 賑わいある所に商いあり

富山・高岡 坂下商店街振興組合



八月の第二日曜日、朝五時半。日本三大大仏の一つに数えられる高岡大仏のお膝元、富山県高岡市の坂下商店街で開かれている朝市に、「いらしゃいませ」、高陵中学の体験セールです」と威勢の良い掛け声が響き渡った。この掛け声の主は高陵中学の高松さんら三人の先生がた。掛け声の効果か、およそ二時間の間、絶え間なく人が訪れ、中学生が集めた品物はほぼ完売となった。校長の木村勉さんは「地声の大きい先生を選んだんよ」と顔をほころばせる。そして、「来年は子どもたちにもやってもらおうかと考えている」と続けた。

高陵中学の体験セールは、販売だけでなく、「仕入れ」や「値付け」も体験してもらうことに特徴がある。中学生自身が市内の企業、商店に向き、直接セールへの拠出を依頼する。そうやって集められた品物は、玩具、ノート、衣料品、洗剤などの日用雑貨、贈答品と思われる花瓶など五千点にのぼる。次は値付けの作業。このときには中学生の好み色が濃く反映する。一・五kgの洗剤が三百円。高岡特産の銅製の灰皿が二百円といった具合だ。そして、朝市での販売体験。最初、声も身振りもおおざとしい感じだった中学生も、セール終了間際には、両手で売り物のTシャツをかざし、声高に値段を連呼するようになる。

この体験セールを組み込んだ高岡の朝市は二〇年を越す歴史を持っている。昭和五十六年に生活



用品の安定供給をねらいに市役所が音頭をとって始まったが、現在では、運営の主体は商店街に移っている。実行委員会が組織され、すっかり市民の、商店街の行事になった。開催日は、毎年四月から十一月までの毎月第二・第四日曜日。年十六回開催される。その賑わいには驚かされる。商店街の両側の舗道に野菜、果物、魚介類、花卉、さらには日用雑貨など百五十あまりが露店を連ねる。朝五時半という時間にもかかわらず、四月の初日には、軽く一万人を越す人たちが、普段でも五千人あまりの人でこた返す。この朝市の模様を見た「市」の先輩である高知市の「日曜日」の担当者は、その賑やかさに驚嘆したという。とくに近年、出店数も来客数も右肩あがりが増えている。反面、厳しさもある。毎年、出店数の二割程度は入れ替わるといふ。売り上げをあげられない店舗は後退せざるを得ない状況はここでも厳然としてあるようだ。

冒頭の高陵中学校の体験セーブルは、朝市の二〇周年記念として仕組まれた。当時坂下商店街振興組合の理事長だった谷内勝彦さんたちが、学校との連携を打ち出し、高陵中学校に働きかけ始まったもの。今年で、四回目を迎えすっかり定着した。そしてこの取り組みは他の学校にも大きな刺激を与えた。

国吉中学校では、生徒が学校で自らが栽培した花の苗や野菜を六月の朝市で販売しはじめた。朝市の賑わいを昼間にも、とはじめられた昼市（高岡大仏やわやわ参道市と名づけられた）では、子どもたち

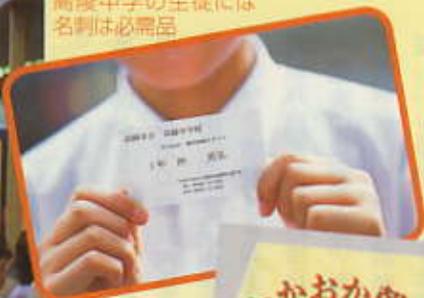


[下]お年寄り向けの休憩サロン「坂下小路」。この日も多くの人で賑わっていた





企業や商店を訪問する
高陵中学の生徒には
名刺は必需品



は主役と言って良いほど参加している。商業科の高校生たちは、各店舗の一日店長として、高岡龍谷高校調理科は、焼きそばや焼きとりを、高岡向陵高校相撲部はチャンコで出店し、坂ノ下保育園児は和太鼓でオープニングを飾り、吹奏楽部は、パレードを、保育園児から大学生までにぎにぎしく参加し、市を盛り上げた。

単に朝市、昼市だけの参加にとどまらない。商業高校情報処理科の生徒たちが商店街の一軒一軒取材し商店街のホームページを作成している。このHPは高等学校のコンクールで最優秀賞に選ばれた。工芸高等学校デザイン科の学生たちは朝市のパンフレットや商店街のテーマソング「坂下街通り」のCDジャケットのデザインをしている。これらの動きは、「商店街からの働きかけというよりも、むしろ子どもや学校側からの働きかけで実現したもの」と谷内さんは言う。

ほほえましい話がある。朝市に出店している水見市の水産加工業を営む矢田部さんは、隣に出店していた「大仏焼き」の手伝いに来ていたお嬢さんと結ばれた。その祝いの宴を朝市のメンバーが開いてくれたという。「市」があるところに賑わいがあり、賑わいあるところに商いあり。坂下商店街の挑戦はこれからも続く。

■高岡商業高校情報処理科の生徒が作成したHPIは

<http://www.tym.ed.jp/sc352/h14sakasita/index.htm>